

# 天部

**天部** 天部は、もとはインドの神ですが、仏教に取り入れられ、如来・菩薩・明王に次ぐ、人間にいちばん近い位置にいる仏です。天部像はぶつ、餓鬼を踏みつけ、武器を構えた形をしています。これは天部が仏教世界を守護する役目を持っているためです。

四天王も天部に含まれ、仏教世界の中心にそびえる須弥山の中腹で、四方から仏土を守護していると考えられています。四天王はそれぞれ、東方に「持国天」、南方に「增長天」、西方に「広目天」、北方に「多聞天」が位置しています。北方の多聞天は、独尊像(一つの独立した仏像)として信仰されることもしばしばあり、その場合は「毘沙門天」と呼ばれます。



木造四天王立像

(大寺薬師：出雲市東林木町)〔平安時代〕

遠方をにらみすえた力強い顔、躍動感あふれた上半身、どっしりと安定感のある下半身……。いずれを見ても、中央の作に比べて見劣りしない。これほどの像が、中央から遠く離れた出雲の小寺院に残されていることは驚嘆すべきことである。



木造天部像群

(多陀寺：浜田市生湯町)〔平安時代〕

鳥根県には、なぜか天部像が多く見られるが、なかでも多陀寺には、朝鮮半島から流れ着いたと言われる59体もの天部像が安置されている。なぜ同じタイプの天部像がこれほど多く集まったのかは謎である。

# 明王

**明王** 如来が衆生(すべの生き物)を教え導く際、敵対するものが現れたときににらみつける姿をあらわしたのが、明王像です。如来や菩薩とは対象的に、恐ろしい形相をしているのが特徴です。

不動明王とは密教で創作されたもので、如来の教えに背く衆生をくじいて教化するために、大日如来が仮に現れた姿とされています。不動明王はインドで成立したものとされますが、インド・中国に不動明王像はほとんど現存していません。

# その他の仏像

一般に仏像というと如来・菩薩・明王・天部を指しますが、そのほかにも高僧・偉人など仏教に関係深い人びとや、他の宗教に由来する神々を仏像として表現する場合もあります。つぎに紹介する羅漢や、聖徳太子像などがよく知られています。また、七福神などの神像が寺に置かれることもあります。

## 仏像の見方講座【2】

### 仏像の姿勢

仏像の姿勢は、立っている立像、座っている坐像、釈迦入滅の際の姿をあらわした臥像などいろいろです。さらに立像や坐像、臥像の中に、いろいろポーズをしたものがあります。なかでも手印(手の形)にさまざまなポーズを取る坐像が、もっとも千差万別な姿を取ります。



### 仏像の作り方

仏教が伝わってきたとき、日本人は仏教の教えよりも、金色に輝く仏像の美しさに目を奪われたようです。以後日本の彫刻美術は、仏像製作を中心に推移していきます。

造仏方法には、木に彫刻する木造、銅を溶かして型に流し固めて造る銅造、土を固めて造る埴造、漆を使って造る乾漆造、石に彫刻する石造などがあります。



木造一木造り



木造寄木造り